

2021年度 入学試験問題  
(仙台・東京・東海・高松会場)

国 語

(60分)

〔注意〕

- 
- ① 問題は㊦～㊰まであります。
  - ② 解答用紙はこの問題用紙の間にはさんであります。
  - ③ 解答用紙には受験番号、氏名を必ず記入すること。
  - ④ 各問題とも解答は解答用紙の所定のところへ記入すること。
  - ⑤ 各問題とも特に指定のない限り、句読点、記号なども一字に数えること。
- 

西大和学園高等学校



問題は次のページから始まります。

次の文章は、「安楽死」について論じたものである。これを読んで、あとの問いに答えよ。

(注)

この問題を考えるとき、私はどうしても医療者の立場も考えてしまいます。

医師というのは何重もの苦しみを背負わされています。第一に、何とかして人の命を助けたいという願いを抱いて職業につくものです。命を救いたい、苦しんでいる人の力になりたいと願わない医師はいませんが、実際に医師になってみると、その力は微々たるもので、救うことのできた命の数倍、数十倍の数の患者が亡くなっていく。そのことの苦しみがまずあります。

その上で、自分の患者が死にもまざる苦しみを感じているのに、苦しみを取り除く手段が相手に死を与えることしかない、といったような状況に直面することもあるのです。そんな時の<sup>①</sup>医師としての矛盾は、苦しみがいわば二重三重になっているわけですから、あえて自分の力を、死を与えることで、苦しんでいる人のために使つてあげようと決意するまでに、どれほどの思いがあるか。また実行した後に自らの内に起こる<sup>a</sup>ジセキの念に堪えなければならぬことも、当然予想される。そうした「共苦」の気持ちを持つて安楽死を実行する医師をとがめる資格は誰にもないのではないかと私は思っています。

ただ、それをほんの少しでも<sup>②</sup>医師に強要するようなことがあつてはいけません。

オランダなどでも、安楽死を実行した医師が非常に苦しむ事例が、いくつも伝えられています。もつとも、その一方で、法的に許されているのだからこれも医師の<sup>b</sup>ツツめの一つだと、割り切つて、淡々と薬を渡す場合もあるようです。

逆に言えば、安楽死が制度化されるとすれば、それは病んだ社会とすべきではないか、とさえ思います。もしそんな事態が日常化するとすれば、それは病んだ社会とすべきではないか、とさえ思います。

安楽死を望む人に、文字通りの「共苦」の思いで臨んでくれる相手がいたとき、それは幸せなことです。医療の側も、医師になるということはそういう場面に<sup>c</sup>ソウグウすることでもあるのだと、受け止められるような教育が必要です。人の死を宣告できるのは、医師だけに与えられた特権でもあります。そうである以上、それだけの覚悟を持った医師が育つことが望ましいと思います。

繰り返しになりますが、「六つの目以下ならば」という話を私にくれた父は、医師になるにはいくつもの覚悟があるのだという戒めを伝えたのだと思います。

まず、人の命を救おうと全力を尽くす覚悟。全力を尽くしても救えない命はあり、そのまま見送らなければならない数のほうが多いという事実と直面する覚悟。自分が最初に立てた、人の命を救うという誓いに背いてでも、患者の苦しみを思いやって、慈悲の死を与える覚悟。医師になるということは、それだけの覚悟があるのだ、と。

そのことを感じ取った時、すでに書きましたように私は「自分には、特にその最後の覚悟はできないな」と思いました。もう戦後になつていましたので、自分は、兵士になつて戦場へ行き、敵に向けて銃の引き金を引く事態は、幸い免れたことがわかつていました。たとえ正当防衛でも、自分が殺されないために人を殺すことはしないでおきたい。そんな風に考えてもいましたので、「自分にはできない」と思えたのです。『歎異抄』の中の「我が心の良くて殺さぬにはあらず」という言葉を思い出します。人は倫理的に正しいことをしなければならぬ、人を殺すことは倫理的に正しくない、だから人を殺すことは自分に禁じる、と合理的に、と単純に言えたら、むしろ良いのに、とも思います。そうではない、私は単に極端に臆病なのです。

父の跡を継いで医師にならなかつたのは、高校生のときに肺結核とシンダン<sup>d</sup>された、という健康上の理由が最も大きいのですが、自分の内面を掘り下げてみれば、<sup>③</sup>そのときの思いも大きかつたように思います。

Ⅱ 同時に、自分が臆病で持てなかつた覚悟を、他の人には求めている。まことに身勝手ではないか、それには、申し訳ないと思う気持ち、ある種の負い目も、自分の中にはずつとわだかまつていると思えます。

日本の社会は、いったん決まつた制度や社会慣行に、自分の意志や決断をゆだねてしまう傾向があります。「お上意識」の名残でもありましょう。法律や制度がそうなるなら、それに任せておけばいい。意志決定に参加せず、決められたことに従う。自分が悩んで決断するよりそのほうがよいと考えがちです。公的な基準を設定することが、一面では危険とも言えます。

もともと、日本では「公」という字を「おおやけ」と訓じます。この大和言葉は、「大きな家」、Ⅲ 権力を持つ人の住む家であり、具体的には、歴史上の天皇家であり、「公家」という表現もありました。そこに仕える人々が「公卿」ということにもなりました。「公事」と言えば、朝廷内の政務一般を指す言葉として使われました。江戸時代になると、朝廷に代わる権力機構としての幕府が、それを代表することになりました。「公事方御定書<sup>せきじかたのおさだめがき</sup>」は、まさに幕府の政策の基本を定めたものでありました。「奉公」という言葉も、古くは朝廷への奉仕を、近世には、支配層への奉仕でありました。「公」の変じた使い方では、「裏表」という場合の「表」を意味し、「世間」あるいは「世間体」の意味も生まれました。この場合は、Ⅳ 「世間の眼差し」が基本になつており、「表向き」の感覚が強くなります。念のために付け加えれば、「公園」という語は、明治三年ころに、「パブリック・スペース」のホンヤク語として成立したとされる（白幡洋三郎『庭園の美・造園の心』NHKライブラリー）ようですから、幕末から明治初期に「パブリック」を「公」と訳する習慣は生まれつつあったとは言えるでしょう。

いずれにしても、日本では「公」と言えば、「お上」、あるいは「自分以外の権威ある存在」のことであつて、ヨーロッパ語で言う

「パブリック」の意味はなかったことになります。福沢諭吉（一八三五―一九〇一）は、ヨーロッパから輸入した考え方に基づいて、「公」と「私」とを峻別した人として知られますが、その際「公」という字を当てることに、躊躇はなかったのでしょうか。

ある共同体のなかで、人々が、ある問題が持ち上がったとき、お互いに議論を尽くして、一つの結論に到達する。それが、大方の承認事項である限り、反対であった人も、その結論には通常は従う。しかし、自分の「生」をかけるような決断をしなければならなくなったとき、他者に害を齎さ<sup>もたら</sup>ない限りにおいて、その結論から逸脱することも、共同体としては許容する。そのような、近代市民社会の倫理が、「公」という概念を支えていると、私は信じたのです。そして、<sup>④</sup>安楽死を巡る問題は、まさしく、いま私たちが「公」として考え、行動しなければならぬ時期に来ていると思います。

判断を誰かに任せておけばいい、と言っていられる段階はとうに過ぎたのではないのでしょうか。他の誰かに責任をゆだねるのではなく、自分自身のものとして本気で考えなければいけない。それが結局は、自分を最大限に尊重することにもつながるのです。

（注1）この問題

： 安楽死のこと。

（村上陽一郎『死ねない時代の哲学』による）

（注2）「六つの目以下ならば」

： 関与者が、信頼関係で結ばれた患者本人と医師と患者の家族か看護者の三人に限定されている

場合であれば、安楽死に相当する行為が医療現場で行われることがあったという話。筆者の父が戦後に筆者に話した内容を指す。

問一 二重傍線部 a ~ e のカタカナを漢字に直せ。楷書で丁寧を書くこと。

問二 空欄 I ~ IV にあてはまる最も適当なことを次の中からそれぞれ一つずつ選び記号で答えよ。同じ記号は一度しか使えない。

ア しかし イ たとえば ウ つまり エ むしろ オ だから

問三 傍線部①「医師としての矛盾」とあるが、どういうことか。六十字以内で説明せよ。

問四 傍線部②「医師に強要するようないけな」とあるが、なぜか。その説明として最も適当なものを、次から選び

記号で答えよ。

ア 医師に対して、患者に死を与える苦しみを強いる可能性もある一方で、安楽死が制度化されてしまうと安楽死を形式的に扱う社会になってしまう恐れがあるから。

イ 医師に対して、患者に死を宣告する苦しみを強いる可能性もある一方で、安楽死が制度化されてしまうと安楽死の是非を問わない社会になってしまう恐れがあるから。

ウ 医師に対して、周囲からとがめられる苦しみを強いる可能性もある一方で、安楽死が制度化されてしまうと死をぞんざいに扱う社会になってしまう恐れがあるから。

エ 医師に対して、患者を救うことを諦める苦しみを強いる可能性もある一方で、安楽死が制度化されてしまうと安楽死を日常的に扱う社会になってしまう恐れがあるから。

オ 医師に対して、患者の死と向き合う苦しみを強いる可能性もある一方で、安楽死が制度化されてしまうと安楽死を行う特権を乱用する社会になってしまう恐れがあるから。

**問五** 傍線部③「そのときの思い」とあるが、どのような思いか。その説明として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

えよ。

ア 高校生の時に肺結核になり、病気と関わることは苦しいので避けたいという思い。

イ 患者を思いやって死を与える勇気がなく、そのような場面は避けたいという思い。

ウ 正当防衛であつても、自分が殺されないために相手を殺すことは避けたいという思い。

エ 人は倫理的に正しいことをする必要がある以上、人を殺すことは避けたいという思い。

オ 自分が持てなかった覚悟を他の人に強要することは、申し訳なく避けたいという思い。

**問六** 傍線部④「安楽死を巡る問題は、まさしく、いま私たちが「公」として考え、行動しなければならぬ」とあるが、これについて次の問いに答えよ。

て次の問いに答えよ。

(1) ある問題に対して、日本の社会は伝統的にどのように向き合ってきたか。それが説明されている最も適当な一文を抜き出し、初めと終わりの五字をそれぞれ答えよ。

(2) 「安楽死を巡る問題」に対してどのように向き合うべきだと筆者は考えているか。九十字以内で説明せよ。

次の文章は、宮下奈都の小説の一節である。骨董屋の娘である麻子は、幼い頃から不器用な自分と、可愛く聡明な妹の七葉を比較していた。七葉と距離を置くため、麻子は親元を離れて靴屋に就職するが、仕事に慣れず忙しい日々を過ごしていた。これを読んで、あの問いに答えよ。なお、本文を一部省略した箇所がある。

この店はお客ひとりひとりの足を把握し、ぴったりの靴を提供することに力を注いでいる。ただし、そればかりでもない。むしろ、お客はショーウィンドーに飾られた美しい獲物を見、取り憑かれたように扉を開けて入ってくる。そうして、一度気に入ってしまった靴からは絶対に目を離さない。対応に出た店員との会話も上の空で、ただただその靴を履きたい一心でそこにいる。

「履いてみていいかしら」

そう言ったときにはその靴をもうほとんど手に入れたような気持ちでいる。目の色が変わっているのがわかる。もしもサイズが合わないなら、足のほうをなんとかしようという意気込みだ。

この感じは前にも経験したことがある。私<sup>①</sup>が知っている何かととてもよく似ている。そう思いながら私はその正体を突き止めようとはしなかった。煩<sup>わづら</sup>わしいことに近づく<sup>①</sup>と発せられる警戒警報が耳の奥で小さく鳴っていた。

ある日の帰り、更衣室で中村さんと一緒になった。その日は遅番で、店を閉める頃には陽も落ち、すっかり暗くなっていた。私は夜に弱い。感じのよくないお客の相手を夕方から長くしていたこともあり、いつにも増して疲れていた。中村さんは私が履き替えたスニーカーをちらつと見て、

「それは賢い選択だと思う」と笑った。

「そうだ、今日、どうかしら。店で、靴、見ない？」

断る理由を咄<sup>とら</sup>嗟<sup>さ</sup>に思いつけなかった。最初に誘われてから半年も経っていた。

「それとも、この後、何か予定でもある？」

「いえ」

私は首を振る。約束も予定もない。ひとりのアパートへ帰るだけだ。このところ、安藤くんからの電話の間隔も開いてきている。たまに会って話せても、些細なことに苛立つ彼を見ているのが悲しい。

「ちょうど店長もいるし、いい機会だと思うよ」

促されて私は、スニーカーをもう一度制服用の靴に履き替えた。

足のサイズを詳しく計るのは初めてだった。23のE。それでこれまで通ってきたし、疑ってもいなかった。それなのに、店長が言うには私の足は「23・25。その言い方で言うならね。アメリカのサイズ6にぴったりよ」ということだった。

「フェラガモによれば、あなたの足のサイズを『ヴィーナス』って言うらしいわ。完璧な足。でもまあ、あんまり意味はないのよ、サイズには。大きさの目安にはなるけど、靴だってひとつひとつ違うわけだし」

そう言いながら、店長は、A唇を結んだ。口角が上がっているから笑っているようにも見えた。

「それで、どんな靴がお望みなのかしら」

特に望みはない。靴には特に望みなどない。私は困った。中村さんは私を店長に引き渡したら帰るものかと思っていたのに、黙ってそばについている。

「じゃあ、履いてみたい靴は？言葉ではうまく言えなくても、実物を見ればピンと来るでしょ」

店長が私を促す。それで、ひとつ、靴を思い出した。あまりにも値段が高いので、自分には関係のない靴だと思っていた。でも、履いてみるだけなら、あれがいい。奥の棚の陰で私が指した靴を見て、店長は口許をゆるめた。

「ああ、それはね、誰かさんがすごく気に入ってる靴よね」

視線を追って振り返ると、中村さんが、何も言わずに目を伏せた。

「そのブランドは本国でもともと数をつくらないのね。この店には、シーズンごとに一足とか二足とか、それくらいしか入ってこない。でも、品物は素晴らしいから、私としてはもつと目立つところに置きたいんだけどーたしかミーティングでもそうすることに決めたはずなんだけどーどうしてだかいつも柱の陰なんかひっそり移動してるのよね」

店長はおかしそうに笑った。

「いいかしら、中村さん。津川さんに履かせてあげても」

中村さんは目を上げ、Bうなずいた。

「サイズはだいじょうぶそうね。あなたの足は見事な標準サイズだからーいけると思うわ」

中村さんは背が高く足も長いから、きつとこの靴は小さすぎるのだろう。それにしても、そんなに気に入っている人の目の前で、当分の靴を入れるのは緊張する。別の靴にします、と言いたい気持ちをなんとか抑えた。数ある靴の中から一足だけ選び出された靴が自分のいちばん気に入っている靴だとしたら、私なら、うれしい。たとえそれが靴に関してまったく素人の、お洒落にささえして興味

のない、冴えない新人だったとしても。

私は気持ち奮い立たせて靴に足を入れた。靴べらを使って踵かかとを落とす。

「あ、ちょっときついまいたいです」

ほっとして、私は言った。サイズがぴったりだったから、中村さんに後ろめたいような気がしたし、なにより、鼻の頭に汗をかくくらい高い靴を買う羽目になる恐れがある。

店長は動じなかった。

「ほんとうにきつい？ 踵はきつちり包み込まれるようにできているのよ、少しきつく感じるくらいでちょうどいいの」

そうして私の足の入った靴を踵、爪先、と指で押し、指の付け根のあたりを両側からつかんでみて、うん、いいみたい、と言った。

「指の先の捨すてて寸も理想的だと思うわ」

ほら、と背中を押され、そのまま二、三步歩いてみる。あ。あ。あ。歩くたびに声が出そうだった。

足の動きに靴が完全についてくる。この靴、ただ者ではない。土踏まずにびたりと吸いつくような感じは、今までに味わったことのない感触だ。重いのに軽い。存在感はあっても歩く邪魔にならない。それどころか、裸足はだしよりも気持ちがいくらいだ。どこまででも歩いていける気がした。自然に笑みがこぼれた。

売り場を一周し、店長と中村さんの前に戻った。どう？ というように笑みを浮かべた店長に黙礼し、中村さんのほうへ向き直る。

「中村さん、これ、すごいです。こんな靴、初めてです」

中村さんは笑って、<sup>②</sup>それはよかった、と言った。

「ありがとうございます」

「どうしてあなたがお礼を言うの」

「こんな靴があるなんて、知りませんでしたから」

店長と中村さんが顔を見あわせて笑う。

「あなたってしあわせねえ。この店、靴好きの間じゃこれでも名の知れた店なのよ。入社するの、けっこう大変なんだから。津川さんみたいに、靴のくの字も知らないで入ってきて、今頃いい靴を知ってよろこんでるなんて、ほんとに、のんきなものよ」  
そう言いながら、楽しそうだ。

「その靴を選んだっていうのは見所があると思う。ねえ、中村さん」

「ちょっと悔しいですけど」

中村さんも笑顔で同意する。

「なんだって、柱の陰に隠しちゃうくらいお気に入りだったんだものね。で、この人に譲ってあげていいのかしら」

中村さんはうなずいた。私は困るはずだった。値段がべらぼうに高いのだから。それなのに、やっぱり、ありがとうございます、と答えていた。分割払いもできると聞いていたし、一度足を通してこの靴のよさを知ってしまえば、値段分の価値はあると思った。なにしろ、立っているだけで膝がすつと伸びて、歩けば足が弾むようなのだ。値が張るのもあたりまえだった。——というのは半分嘘だ。後から取って付けた理屈だ。実際には、この靴が自分のものになるうれしさだけで舞い上がっていて、値段のことは頭から吹き飛んでいた。

こうして、初めて足にぴったりの靴が私のものになった。それだけでも私にとっては革命的なことだったのだけど、家に帰って新しい靴にブラシをかけ、クリームを塗り込むうちに、大事なことに気がついた。耳のすぐ後ろで、(注)ひいどろをべこぼこ鳴らされたような感じがした。

このうれしさを私はすでに知っていた。気に入ったものを見つけ出すこと、それを手に入れるときの胸の高鳴り、大切に愛撫あいぶするときのしみじみとしたよこびは、すべて幼い頃に体験済みだった。靴を磨く私の脳裏のうりには、川のそばの古い小さな店の情景が浮かんできて、いくら振り払っても消えなかった。

ひなびた店の奥には父がすわっている。父が目をかけ、愛情をかけた品々が棚で **C** 手足を伸ばしている。呼吸をしているように見える。薄暗い店先ではほのと光を放つものがある。呼び寄せられるようにお客が来る。品物売る側と、買う側、それに品物そのものが、それぞれの立場を超えて交わろうとしている。

私はずっと知っていた。知っているからこそ忘れたいと願った、閉じ込めたはずの記憶だった。ほんとうによいものに触れるよろこびと、それを最も深く受けとめることができるのは自分ではないと知ってしまった絶望。それらをあの古い家にすべて置いて出てきたはずだ。

それなのに今、アパートの小さな玄関にすわって靴を磨きながら私は、自分の中の何かの流れ出すのを感じている。もしかしたら、と祈るような気持ちで左手の靴を見つめている。私の足にぴったりの靴が、封印を解く。私にも、愛せるかもしれない。捉えようのなかった靴屋という仕事が始めてこちらを振り返り、次の角あたりで待っていてくれそうな気配がしている。

たった一足の靴が、私の世界を変える。靴に対する見方が **D** 回転し、同時に私も回転したのだろう。違う場所からのぞく世界

は、ちゃんとそれにふさわしい、今まで見たこともなかったような顔を向けてくる。靴をもっと、もっともっと知りたいと思った。

知りたくない、と言ったのは安藤くんだ。電話は滅多にながらなくなっていた。お互いに忙しいのだからしかたがない、と私は思おうとした。電話がかかってこない理由ではなく、自分がかけない言い訳として。

「前から言おうと思ってただけど」

やっと通じた電話の途中で、安藤くんは切り出した。

「麻子は忙しすぎる。全然会えないじゃないか。週末も休みが取れないし」

「ごめん」

でも私のせいではない、と言いついそうになってしまった。

「ずっとこんなのが続くんだったら」と彼が言ったとき、私は身構えた。ところが彼が言ったのは意外なことだった。

「辞めちゃえば」

「何を」

何を辞めるというのか、私には思いつくものがなかった。

「仕事だよ、仕事に決まってるだろ。そんな忙しい職場で働くななんて初めから麻子に似合ってたんだ」

「そう、かな」

「そうだよ。どうせ結婚すれば辞めるんだろ、今辞めたって大差ないじゃないか」

誰が結婚すれば辞めるのか、そもそも誰が結婚するのか。受話器を握ったまま私は黙り込んだ。と、<sup>③</sup>安藤くんが不機嫌な声で言う。

「なんだよ、何が不満なんだよ」

しばらく前から、安藤くんの口調がぞんざいになったことに気づいていた。結婚をして、仕事を辞め、家の中でただひとり話す相手がある横暴な話し方をするのでは奥さんは悲しいだろうな、と思った。奥さんに自分の顔はあてはまらなかった。

「今は覚えることがたくさんあって大変なのよ。もう少し待って、じきに落ち着くと思うから。ほら、もうすぐ冬物が入ってくるし」

そう言いかけたとき、安藤くんが遮った。

「知りたくないよ、そんなこと。麻子の仕事の話なんか聞いてもしようがない」

ごめん、と私は言った。もう少し、がどれくらいなのか、待つてもらってどうするつもりなのか、私にもわからない。安藤くんだけを責めるわけにはいかない。

誰もが懂れている一足の靴があった。まんなかの靴台のいちばんいい場所に凜と胸を張っている。歴とした商品なのに、店のシンボルのような存在として前々期からそこにあるという。うかつに近づくことのできない威厳が放たれ、私はその靴の前に出ると陶然として身動きが取れなくなる。

店のスタッフもお客も、その靴が気になってしかたがない。そのくせ、何気なさそうに近づいていって E 見たり、せいぜい指の先で触れてそのひんやりした革の感触に身を震わすのが精いっぱいだ。恐ろしいほど高価だったせいもある。でも、それよりも、この靴が王様だということに皆が気づいていたせいが大きいと思う。この靴を履けば、自分は家臣にならなくてはいけない。それがわかってきた。一步間違えると家臣ですらない、奴隷として尽くすことになる可能性だつてあった。

我孫子さんがその靴と一緒に消えたのは、冷え込んだ冬の晩だった。ぽつちやりとした柔和そうな彼女が、台からあの靴を下ろしたときにどんな顔をしていたのか想像もつかない。私はただ怖かった。怒るような気持ちにはなれなかった。ものすごい形相で怒っている同僚たちの間で、私はたつたひとりで別の衝撃に耐えていた。一足の靴のために何もかも棒に振って逃げた我孫子さんと、靴が奪われたことを知ったときの同僚たちの顔がひとと重なる。<sup>④</sup> 私にはあんな顔はできない、と思った。

嫌な予感がしていた。まさか、なのか、やっぱり、なのか。どう考えればダメージが少なくて済むのか、目の前に唐突に姿を見せた現実に対処する方法を私は必死に考えていた。

あの人たちは、不自由だ。我孫子さんも、同僚たちもだ。靴に対する思い入れが強すぎて、現実のほうを歪めている。靴泥棒も、それを今にも自分が犯してしまいたいそうだったからこそひどく狼狽して怒った同僚たちも、靴によって軟禁されているようなものではないか。それに比べて私はどうだろう。まったく自由だ。私には靴を盗まない自信がある。つまり私は彼女たちほどには靴を愛せないし、靴に愛されてもいないということだ。

何も変わっていないなかった。心の底から何かを愛したり欲したりすることのできる人と、そうはできない人がいる。私は後者だった。その真実を突きつけられて川沿いの家から逃げてきたあの頃の私と、何も変わっていないのだった。

どうして靴を愛したかったんだったか。靴屋の有能な店員になることが目標ではないはずなのに、こんなに切羽詰まって靴を追いかけているのはなぜだろう。

答えは簡単だ。さびしいからだ。私には何もない。愛することのできるものも、強く思い入れることのできるものも、気がつくともわりには何もなかった。小学生の頃、小さな陶片を七葉と取りあったことを、嫌でも思い出す。あのとき、七葉は力づくでつかんで離さなかった。私と喧嘩になっても、祖母に叱られても、離さなかった。力づくでつかめるかどうかが鍵なのだ。私の手の中にはない、そういう頑なな一途さが今でも憎いほど羨ましい。

(宮下奈都『スコールNo.3』による)

(注1) フェラガモ … イタリアのファイルンツェに本社を置くイタリアの会社。

(注2) 捨て寸 … 靴を履いたときつま先と靴の空間のこと。

(注3) びいどろ … 口にくわえて息を出し入れすると音を発する玩具の一種。

問一 二重傍線部 a 「陶然」、二重傍線部 b 「狼狽」の意味を次の中から最も適当なものをそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

a 「陶然」                    ア 熱心でいるさま                    イ 感心しているさま                    ウ 気が抜けているさま

                                  エ 仰ぎみるさま                    オ うっとりしたさま

b 「狼狽」                    ア 怒りをあらわにすること                    イ あわてふためくこと                    ウ ぼんやりとすること

                                  エ 落ち着いていること                    オ 同情すること

問二 

A
---

、

E
---

に当てはまる最も適当なものを、次の中から一つずつ選び、記号で答えよ。

ア のびのびと                    イ しつかりと                    ウ ぐるりと                    エ ちらちらと                    オ きゅっと

問三 傍線部①「私知っている何かととてもよく似ている」とあるが、何と似ているのか。四十字以内で説明せよ。

問四 傍線部②「それはよかった、と言った」とあるが、この時の中村さんの気持ちはどのようなものか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 仕事で成功を取めた時に購入しようと思っていた靴を、入社したばかりの麻子にあっけなく取られてしまったことを悔しがる気持ち。

イ 本国での生産数が少なく高価なブランド靴を、麻子が店の売り上げに貢献するために購入してくれるのではないかと期待する気持ち。

ウ お客に購入されないように柱の陰に隠していたお気に入りの靴を、数ある靴の中から麻子を選び気に入ってくれたことに喜ぶ気持ち。

エ 背丈が高く自分のサイズには小さすぎて合わなかった靴を、お洒落に全く興味のない麻子が履きこなしていたことに嫉妬する気持ち。

オ ミーティングでの決まりを破ってまでお店に残しておきたかった靴を、靴に関心がない麻子に発見されてしまったことに驚く気持ち。

### 問五

傍線部③「安藤くんが不機嫌な声で言う」とあるが、この時の安藤くんの気持ちとして、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 安藤くんは思いを寄せる麻子と結婚できると思っていたのに、麻子からの愛情表現も結婚の返事も一切なかったので、落胆している。

イ 安藤くんは忙しく振舞う麻子をとましく思っていたのに、仕事に取り組みうとする麻子を応援したいと思い始め、驚きを隠せないでいる。

ウ 安藤くんは麻子との結婚生活を楽しみに思っていたのに、今の仕事を続けたいと麻子に断られてしまったので、憤りを覚えている。

エ 安藤くんは麻子と休日に会いたいと思っていたのに、麻子は自分よりも仕事に夢中になっていることを感じ取り、不愉快になっている。

オ 安藤くんは麻子を支えていきたいと思っていたのに、麻子の職場が充実していることが分かり、何も知らなかった自分を恥じている。

### 問六

傍線部④「私にはあんな顔はできない、と思った」とあるが、なぜか。八十字以内で説明せよ。

### 問七

本文の「麻子」に関する内容に当てはまるものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 社会人になってお洒落に興味がなくなった麻子は、お洒落の一つとして靴を大事に扱う職場の人とは価値観が全くあわず、職場では浮いた存在になっていた。

イ 容姿に自信がなかった麻子は、憧れの店長が店内に置いてある靴の中から麻子に似合う靴を探し出してくれたので、仕事を前向きに取り組めるようになった。

ウ 初めて高額な靴を手に入れた麻子は、この靴に似合う女性になってほしいという中村さんの思いが伝わってきたので、靴屋で働くことに誇りを持てるようになった。

エ 今まで恋愛から遠ざかってきた麻子は、いつも仕事の悩みを聞いてくれていた安藤くんが急に横暴な話し方をしたので、不信感を抱き呆然とってしまった。

オ 靴を愛することのできない麻子は、幼い頃から社会人になった今でも一つのものに執着し愛することができず、妹の七菜に対して劣等感と羨望を抱き続けていた。

問題は次のページに続きます。

次の文章は『堤中納言物語』の一節である。「男」には、同居するもとの妻である「女（もとの人・あてに「ごしき人」）がいたが、よそに「新しい妻（今の人）」をもうけた。その「新しい妻」を家に迎えねばならず、「男」は心中つらいが、「女」にしばらくどこかに居てほしいとほめかす。「女」は「男」の思いを理解し、家を出ていこうとする。これを読んで、あとの問いに答えよ。

男、「あはれ、かれもいづちやらまし」とおぼえて、心のうち悲しけれども、今のがやごとなければ、かくなど言ひて、けしきも見むと思ひて、もとの人のがり往ぬ。

見れば、あてに「ごしき人の、日ごろ物を思ひければ、少し面瘦せて、いとあはれげなり。うち恥ぢしらひて、例のやうに物も言はで、しめりたるを、心苦しう思へど、さ言ひつれば、言ふやう、「志ばかりは変らねど、親にも知らせで、かやうにまかりそめてしかば、いとほしさに通ひはべるを。つらしと思すらむかしと思へば、何とせしわざぞと、今なむ悔しければ。今もえかき絶ゆまじくなむ。かしこに、土犯すべきを、ここに渡せとなむ言ふを。いかが思す。ほかへや往なむと思す。何かは苦しからむ、かくながら、端つかたにおはせよかし。忍びて、たちまちに、いづちかはおはせむ」など言へば、女、「ここに迎へむとて言ふなめり。これは親などあれば、ここに住まずともありなむかし。年ごろ行くかたもなしと見る見る、かく言ふよ」と、心憂しと思へど、つれなくいらふ。「さるべきことにこそ。はや渡したまへ。いづちもいづちも往なむ。今まで、かくてつれなく、憂き世を知らぬけしきこそ」と言ふ。いとほしきを、男、「など、かうのたまふらむや。そにてはあらず、ただしばしのことなり。帰りなば、また迎へたてまつらむ」と言ひ置きて出でぬる後、女、使ふ者とさし向ひて、泣き暮す。

「心憂きものは世なりけり。いかにせまし。おし立ちて来むには、いとかすかにて出で見えむも、いと見苦し。いみじげに、あやしうこそはあらめ、かの大原のいまこが家へ行かむ。かれよりほかに知りたる人なし」。かく言ふは、もと使ふ人なるべし。「それは、片時おはしますべくも侍らざりしかども、さるべきところの出で来むまでは、まづおはせ」など語らひて、家のうち清げに掃かせなどする、心地もいと悲しければ、泣く泣く恥づかしげなるもの焼かせなどする。

今の人、明日なむ渡さむとすれば、この男に知らすべくもあらず。車なども誰にか借らむ。「送れとこそ言はめ」と、思ふもをこがましけれど、言ひやる。「今宵なむ、物へ渡らむと思ふに、車しばし」となむ言ひやりたれば、男、「あはれ、いづちとか思ふらむ。いかむさまをだに見む」と思ひて、今、ここへ忍びて来ぬ。女、待つとて端に居たり。月の明きに、泣くこと限りなし。

わが身かくかけ離れむと思ひきや月だに宿をすみはつる世に  
 と言ひて、泣くほどに、来れば、さりげなくて、うちそばむきて居たり。

(注1) 今のがやごとなければ

∴ 「新しい妻が大切なので」ということ。

(注2) もとの人のがり往ぬ

∴ 「もとの妻のもとへ帰った」ということ。

(注3) 心苦しう思へど、さ言ひつれば

∴ 「気の毒とは思うが、新しい妻を家に迎える旨新しい妻の親と約束したので」ということ。

(注4) いかにせまし

∴ 「どうしようかしら」ということ。

(注5) かれよりほかに知りたる人なし

∴ 「彼女(いまこ)よりほかに知った人はいない」ということ。

(注6) さるべきところの出で来むまでは、まづおはせ

∴ 「適当な場所が見つかるまでは、まずはいまこの所へいらっしゃいませ」ということ。

問一 波線部 a 「少し面瘦せて」、波線部 b 「言へば」、波線部 c 「帰りなば」、波線部 d 「言ひやる」の主体(主語)は誰か、次の中

から最も適当なものをそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。同じ記号を何度使ってもよい。

ア 男 イ 女 ウ 新しい妻 エ 新しい妻の親 オ いまこ

問二 二重傍線部 A 「かれもいづちやらまし」、二重傍線部 B 「ほかへや往なむと思す」、二重傍線部 C 「いづちもいづちも往なむ」と

あるが、それらの語の本文中の意味として最も適当なものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、記号で答えよ。

A 「かれもいづちやらまし」

ア あの男をなんとかして助けてやりたい

イ あの男をなんとかしても追いかえしたい

ウ あの男はどちらへ行ったのであるうか

エ 同居する女をどこへ行かせようかしら

オ 同居する女をなんとかすくい出したい

B 「ほかへや往なむと思す」

ア あなたはよそへ行こうとお思いになっている

イ あなたはよそへうつろうとお思いになるのか

ウ あなたはよそへうつろうとお思いにならない

エ あなたはほかの部屋に住もうとお思いになる  
オ あなたはほかの部屋を出るとお思いになるか

C 「いづちもいづちも往なむ」

ア 私はどこであったとしてもうつろう  
イ 私はどこへうつろうこともできない  
ウ 私はどこへ行こうか、いや行かない  
エ あなたはどこへうつろうというのか  
オ あなたはどこへとも行つてしまえ

問三

傍線部①「いとほしさに通ひはべるを」とあるが、どういうことか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 気の毒に思ったから新しい妻と交際したのかと女が男を責め立てているということ。  
イ 新しい妻が好きなのかと、そのことを隠していた男を女は責めたという事。  
ウ 新しい妻が好きでたまらないから出て行つてくれと女に男が迫っているということ。  
エ 気の毒に思ったから新しい妻と結婚したのだと男が言い訳を言っているということ。  
オ 気の毒に思うのならどこかへ毎日通つてほしいと男が女に懇願しているということ。

問四

傍線部②「ここに迎へむとて言ふなめり」とあるが、これは「女」があることを悟った場面である。今後自分はどうなると悟つたのか。解答欄に合うように、十五字以内で説明せよ。

問五

傍線部③「つれなくいらふ」とあるが、どういうことか。人物関係を補いつつ、三十字以内で説明せよ。(直前の「心憂し」は、「つらい」、傍線部の「つれなし」は「①冷淡だ・②心情を隠し平然としている」、「いらふ」は「返事する」の意味を持つ。)

問六

傍線部④「さりげなくて、うちそばむきて居たり」とあるが、どういうことを表しているか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 月がとても趣き深く美しいので自然と涙があふれ、男が来たことに女が気づかない程、月に心を奪われているということ。  
イ 月がとても趣き深く美しいので自然と涙があふれ出たが、その涙を男に見せないように女は男から顔を背けたということ。  
ウ 家を追い出されるとは思いもよらず悲しくて涙があふれたが、その涙を見せないように女は男から顔を背けたということ。  
エ 家を追い出されるとは思ってもみなかつたので、男が来たことにも気づかないくらい女はひどく悲しんでいるということ。

オ 家を追い出されると知った悲しさから、女は涙が流れるのも気にならぬほどひどく肩を落とさうつむいているということ。

### 問七

本文の内容として、合致しないものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 娘を男の家に住ませてくれと新しい妻の親が言うので仕方ないと、男は女に説明している。
- イ 女は自分から出ていくと告げるなど、悲しみを男にさとられまいと気丈にふるまっている。
- ウ 出ていくことを女が決めると、男は迎えに行くからと、女の心を引き留めようとしている。
- エ 追い出される女は、知り合いもいないので、以前の召し使いを頼るしかないと考えている。
- オ 女は自分で出ていく他ないので、筋違いだとは思うものの男に車を貸してほしいと頼んだ。
- カ 男は自分を捨てて出ていく女を許すことはできず、女の居所を探そうと使者をつかわした。







国語解答用紙

	受験番号		氏名

※の欄には何も書かないで。

一									
問六					問四	問三		問二	問一
					(2)			I	a
					(1)				
					初め	問五			II
								b	
							III		
								c	
					終わり			IV	d
								d	
								e	
								※	
90	70	50	30	10					
80	60	40	20						

二							
問七	問六			問四	問三	問二	問一
						A	a
						B	b
						C	
						D	
						E	
						※	
70	50	30	10	30	10		
80	60	40	20	40	20		

三						
問六	問五	問四	問三	問二	問一	
		「自分は			A	a
問七					B	b
				C	c	
					d	
					15	
				「と女は悟った。」		
※						
30	10					
				20		

※
---